

学生ら調査を基に具体策提案

昭和の町 若者呼び込め

【豊後高田】豊後高田市の昭和の町商店街について、学生目線で魅力や新しいビジネスモデルの可能性を探るプロジェクトの報告会が10月29日、商店街にあるロマン蔵であった。若い世代を呼び込むため、交流サイト(SNS)の活用など具体策の提案のほか、「懐かしさをアピールする考え方を必要がある」といった指摘も出た。

プロジェクトは県内の産 地地域連携プラットフォーム「おおい ム」の地域活動事業。日本官学でつくる組織「おおい ム」の地域活動事業。日本



昭和の町に若者を呼び込む方策を提案する学生＝豊後高田市

SNS活用 ■ 「懐かしさ」転換

文理大、大分大、別府大、大分高専の5グループが参加し、1月から取り組んできた。

報告会には学生や昭和の町関係者ら約30人が出席。学生が夏休みなどに実施した現地調査やアンケートで得たデータを基に、若者の来訪を増やすために考えたプロモーション方法を発表。SNSによるPR、昭和の町ならではのイベント開催、地域通貨の発行といったアイデアを出した。

日本文理大2年の佐藤凜さん(20)は「若い世代にとって昭和は懐かしいと呼べる時代ではない。『知らない』ということを最大の武器として新しい魅力を発信する工夫が必要」と強調した。

昭和30年代をコンセプトにした昭和の町は中高年の来訪が多く、若者へのアプローチが大きな課題の一つとなっている。

市商工観光課の河野真一課長は「いずれも素晴らしい提案だった。中にはかつて市が取り組んでいたものもあり、原点回帰の必要性も感じた」と話した。

(大崎優志)